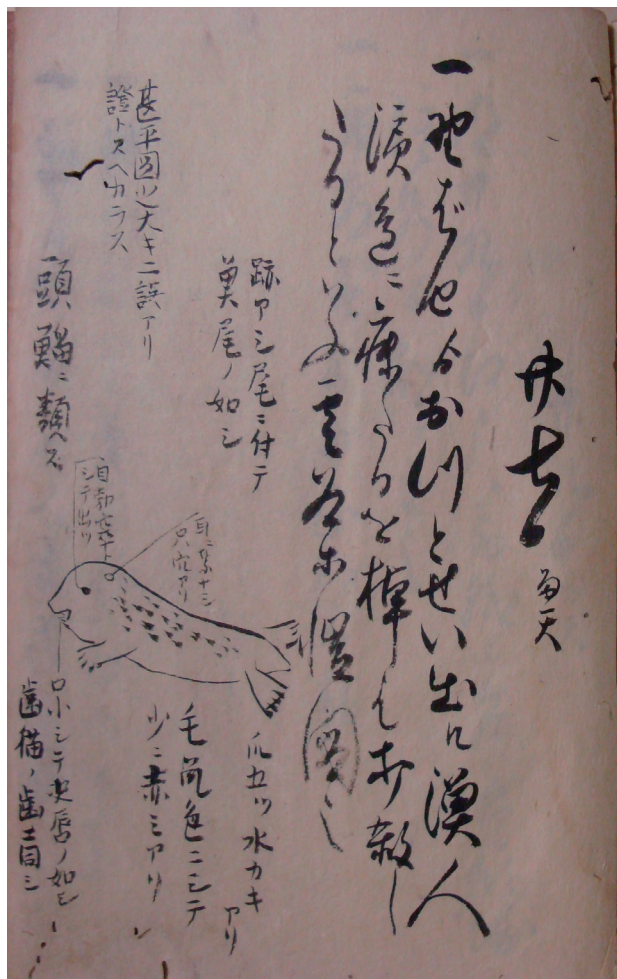


アザラシ・トド



* 毛利家文庫 19 日記18 「密局日乗」 (寛政3年3月27日条)

「一野ばせよりおつとせい出ル 漁人
浜辺ニ寝たるを棹ニて打殺し
たるといふ」

解説

縄文時代の食料や獲物の季節変化を円に書いて表した、いわゆる「縄文カレンダー」には、クジラやイルカのほか、北方地域のものにはアザラシやトドが登場します。

北極圏にはアザラシを食料として狩る民族が現在もあるようですが、肉や血のみならず、皮の利用価値は高く、水濡れに強いので、古くから衣服や履き物に使われたことでしょう。脂肪もまた、照明用に役立ったことでしょう。2002（平成14）年に多摩川に現れたアゴヒゲアザラシの「タマちゃん」以降、各地で発見されるたびに報道され愛称がつけられるアザラシですが、古くは獵の対象でした。

写真は、1791（寛政3）年に野波瀬（長門市）で発見され、棹で打ち殺されてしまったアザラシです（資料上は「おつとせい」とありますが、記された特徴からアザラシと確認できます）。近海に出現することが珍しかったので記録されたのですが、あるいは浜辺の人たちはこの動物の毛皮の利用価値ないし商品価値を知っており、毛皮を傷つけないように棹で打ち殺したのかもしれません。

* 「密局日乗」には、このほかにも1800（寛政12）年に越ヶ浜（萩市）に打ち上がった、トドないしオットセイと思われる海獣が描かれています（11月28日条）。当時の日本は地球規模の小氷期のなかで火山の噴火も相次ぎ、異常な寒冷期でした。九州にも同様の発見記録があります。